様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　９ 月 ２４ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００５１７

研究課題名（和文）大正後期―昭和期の日露文学比較研究：自叙と歴史叙述の問題に即して

研究課題名（英文）Comparative study of Japanese and Russian literature from the late Taisho period to the Showa period: In light of the issues of autobiography and historical narrative

研究代表者
中村　唯史（Nakamura, Tadashi）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：２０２５０９６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、これまで日露比較文学研究において明治期から大正中期に考察が集中していたことに鑑み、大正後期から昭和期の文学史的・類型論的な考察を試みたものである。
特に昭和前期の日本プロレタリア文学運動における徳永直へのゴーリキーの影響、太平洋戦時中の本多秋五のトルストイ『戦争と平和』論の経緯と思想的な文脈の考察に優れた成果を挙げることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究課題は、これまで明治期から大正中期に集中していた日露比較文学研究の空白を埋めることを意図するものであったが、特に大正末期から昭和戦前期の考察において、この目的をある程度達成できた。
ロシア文学は近代日本文学と近代文章語の形成に大きく作用したが、その影響には以後も思想・哲学・文学において大きなものがあった。戦争という極限状況下での作家たちの思想的営為を考察したことは、戦争と紛争の脅威が高まりつつある現代において一定の社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：In view of the fact that studies of comparative literature between Japan and Russia have focused on the period from the Meiji period to the mid-Taisho period, this research project attempts to examine literary history and typology from the late Taisho period to the Showa period.
In particular, this project has produced excellent results in examining Gorky's influence on Sunao Tokunaga in the Japanese proletarian literary movement in the early Showa period, and the background and ideological context of Honda Shugo's study of Tolstoy's “War and Peace” during the Pacific War.

研究分野：比較文学　ロシア文学

キーワード：比較文学　日露　大正末期　昭和戦前期　徳永直　本多秋五　ゴーリキー　トルストイ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

日本とロシアはともに近代化の後発国であり、ロシア文学が日本文学に大きな影響を与えたことは文学史的事実として定説になっている。ただし、明治期から大正中期にかけての日露比較文学には国内外に相当の蓄積があるが、大正後期から昭和期にかけての研究はまだ十分に進捗しているとは言えないのが現状であった。

これには、大きく言って 2 つの理由が考えられる。

１）1917 年のロシア革命後、ロシアがソ連となって社会主義イデオロギーを代表する国となり、日本におけるロシア文学の受容もまたこのイデオロギーと密接に関連するようになったため（その中には昭和戦前期のプロレタリア文学運動の崩壊後、その後継者がそれぞれに直面せざるを得なかった転向の問題も含まれる）、このファクターの検討を抜きにして、この時期の日露比較文学を語るのが困難にならざるを得なくなった。

２）第 2 次世界大戦後、社会主義イデオロギーの権威がしだいに失墜するにつれ、またモダニズムからポスト・モダニズムへと日本文学が近代文学的な要素を弱め、現代文学へと移行する一方で、ロシア（ソ連）文学が体制上の理由もあって近代文学的な要素を維持していたという対照的な経緯から、ロシア文学の日本文学への影響の度合いが低下したため、直接的・実証的な方法での日露比較文学の考察を行うことが困難になった。

本研究は、この学術上の空白を、ロシア・ソ連文学史をよく知る立場から埋めようとする試みとして構想された。

２．研究の目的

本研究は、上記のような現状に鑑み、大きく言って２つの目的を有していた。

１）大正後期から昭和戦前期の日露比較文学を、イデオロギー的な影響を考慮に入れつつ、研究すること。特に着目したのは、社会主義イデオロギーの直接的な影響下に盛んになった大正末期から昭和初期にかけての日本プロレタリア文学に対するロシアの文学作品と批評理論の影響と日露間の齟齬、およびプロレタリア文学運動崩壊後の状況の中で転向し、しかし当時の思潮に同化することなく自分の道を切り開こうとしてゴーリキーやトルストイへの依拠を試みた小説家徳永直や批評家本多秋五の言説である。

２）直接的な影響―被影響関係が顕著ではなくなった第二次世界大戦後の時期の両国文学の比較については、作品の仕組みや思考の類縁性を根拠に、作品や作家を囲繞していた政治的・社会的・思想的状況をも考慮しつつ、作品や思考の異同を構造的に比較対照することを試みようとした。特に着目したのは、ほぼ同時代に並列的に戦争や死者の記憶の問題に正面から取り組もうとした原民喜とオリガ・ベルゴーリツの思想・文体の類縁性、およびその後、やはりほぼ同時期に発生し、隆盛した日本の「内向の世代」（後藤明生ほか、ロシア文学を大学で専攻した作家が少なくない）とソ連の「抒情的散文」との類型的な比較である。

また、この２つを結合して、大正後期から、戦後を含む昭和期の日露比較文学を系譜的に記述することを志向した。

３．研究の方法

日本とロシアはともに近代化の後発国であり、その文学で自伝的な言説が大きな比重を占めていた。ただし、日本の私小説や心境小説が歴史を遮断した「私」に即した文体と構成を持つ傾向が強かったのとは対照的に、ロシアの自伝的言説は歴史の中の自己を表象する志向が強かった。

以上に鑑み、本研究は、自伝的言説および、これと連関性の強い歴史叙述に着目して、おもに大正区後期から昭和期の日露文学の比較を試みた。

方法はオーソドックスなものであった。

１）上記の第１の目的については、言説の詳細な分析と、言説を巡る時代背景、パラテキストに対する考察などを組み合わせて、ロシアの作家の日本の作家に対する影響と齟齬のあり方を浮き彫りにすることに努めた。

２）上記の第２の目的については、日本とロシアで同時代的に類似の作風や志向を示した作家について、相互間の直接的な影響関係を想定することはせず、作品やそれ以外の言説をまず内在的に読解して構造化したうえで比較対照し、両者の異同を明らかにする方法を選択した。そしてそこから更に対象の言説成立時の日本とソ連の状況と、その中での作者の立ち位置を考慮に入

れた考察を試みようとした。

４．研究成果

本研究の目的１）については、ほぼ所定の成果を挙げることができたと考えている。特に、日本プロレタリア文学の代表的な作家のひとりだった徳永直に対するマクシム・ゴーリキーの文学の影響の解明、転向文学の時期にレフ・トルストイの『戦争と平和』の考察に没頭した本多秋五の軌跡の文学史的定位に大きな成果を挙げた。前者についてはロシア語による国際学会での報告および論集所収論文（«Учиться у Горького»: “отступничество” японского пролетарского писателя Токунага Сунао. 題名は「『ゴーリキーに学べ』：日本のプロレタリア作家徳永直の“転向”」の意)、後者については日本語による学術誌論文というかたち（「本多秋五「『戦争と平和』論」考：「アウステルリッツの高い空」と「ピエールの悟り」をめぐって」）に結実させることができた。

その一方で、目的２）――昭和戦後の作家たちの類型的比較については、研究期間内に顕著な成果を挙げることができなかった。これには、世界的な新型コロナ禍、およびロシア軍によるウクライナ侵攻の影響で、日露国内外の図書館・文書館等で十全な調査を行い得なかったことが大きく影響していたと言わざるを得ない。しかし、パラテキスト等の収集の不足を補うべく、関連作家の作品テキストの精読・分析は、研究期間内にも進めることができた。その結果として得た知見については、特にオリガ・ベルゴーリツと原民喜の文体や志向の比較などに一定の進展があったと自負している。これらは、今後の研究に反映し、生かすことができるのではないかと考えている。

また、本研究の延長線上に、主要な研究対象の一人であった徳永直が高く評価し、模範としたゴーリキー初期・中期の自伝的作品群や、戦争と死者の記憶の問題を、独自の様式的な文体と緊密な構成の詩的散文の集成というかたちに結実させたイサーク・バーベリの『騎兵隊』や同じく『オデッサ物語』など、自叙と歴史叙述が合わさったロシア文学の作品群に関する考察も進め、その成果を国内での学会や講演に生かすことができた（「1900－1910 年代のゴーリキーにおける世界―宇宙像」「ゴーリキーの短篇『グービン』の空間構造」、「イサーク・バーベリ『騎兵隊』の語りの問題」などの諸論文)。また、ここに挙げた作品群を翻訳するなどしてまとめ、詳細な解説を付して上梓し、一定の評価と反響を得ることもできた（イサーク・バーベリ作、中村唯史訳・解説『騎兵隊』)。

さらに、ロシア的自然観の成立史を考察した学会報告「〈ロシア的自然観〉の成立とその影響」においても、同じ近代化の後発国であるロシアと日本の比較対照の観点を取り入れて、成果を収めることができた。

なお、本研究の成果は、研究代表者が編者代表として編集したロシア文学の概説本『ロシア文学からの旅：交錯する人と言葉』の序文や解説、項目の構成、担当した約 10 編の項目執筆にも大きく生かすことができたと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 中村唯史	４．巻 なし
２．論文標題 実体化する境界：「ロシアーウクライナ」の二項対立の図式をめぐって	５．発行年 2022年
３．雑誌名 現代思想6月臨時増刊号「ウクライナから問う：歴史・政治・文化」	６．最初と最後の頁 60-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Тадаси Накамура	４．巻 なし
２．論文標題 Структура мира и вселенной в мировоззрении и поэтике М. Горького 1900-1910-х годов	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Русская культура на перекрестках истории: Дальний Восток, Близкая Россия	６．最初と最後の頁 361-373
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中村唯史	４．巻 XXXV
２．論文標題 1900-1910年代のゴーリキーにおける世界ー宇宙像	５．発行年 2020年
３．雑誌名 SLAVISTIKA：東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報	６．最初と最後の頁 343 - 358
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中村唯史	４．巻 60
２．論文標題 ゴーリキーの短篇『グービン』の空間構造	５．発行年 2019年
３．雑誌名 ユーラシア研究	６．最初と最後の頁 30－40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中村唯史	4．巻 34
2．論文標題 本多秋五「『戦争と平和』論」考：「アウステルリッツの高い空」と「ピエールの悟り」をめぐって	5．発行年 2024年
3．雑誌名 むうざ：ロシア・ソヴェート文学　研究と資料	6．最初と最後の頁 9-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中村唯史	4．巻 138
2．論文標題 イサーク・バーベリ『騎兵隊』の語りの問題	5．発行年 2023年
3．雑誌名 世界文学	6．最初と最後の頁 20-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Тадаси Накамура	4．巻 なし
2．論文標題 "Учиться у Горького": “отступничество” японского пролетарского писателя Токунага Сунао	5．発行年 2023年
3．雑誌名 The Reception of East Slavic Literatures in the West and the East	6．最初と最後の頁 149-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.36253/979-12-215-0238-1.14	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 Tadashi Nakamura
2．発表標題 “Return to Gorky”: “Conversion” of a Japanese proletarian writer Tokunaga Sunao
3．学会等名 The Reception of East Slavic Literatures in the West and the East (at Universita Ca’ Foscari, Venezia)（国際学会）
4．発表年 2023年

１．発表者名 中村唯史
２．発表標題 本多秋五「『戦争と平和』論」をめぐって
３．学会等名 日本ロシア文学会関西支部2020年秋季研究発表会
４．発表年 2020年

１．発表者名 中村唯史
２．発表標題 二項式への違和と抵抗―近代以降のロシア文学における戦争の表象
３．学会等名 世界文学会2023 年度 連続研究会「戦争を問う」 第二回研究会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 中村唯史
２．発表標題 〈ロシア的自然観〉の成立とその影響
３．学会等名 ロシア・東欧学会2023年度研究大会共通論題「スラブ・ユーラシアの環境を考える」（招待講演）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計2件

１．著者名 中村唯史、坂庭淳史、小椋彩（編著）	４．発行年 2022年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 256
３．書名 ロシア文学からの旅	

１．著者名 イサーク・バーベリ作、中村 唯史訳・解説	４．発行年 2022年
２．出版社 松籟社	５．総ページ数 256
３．書名 騎兵隊	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関